陽だまりのキミ

トマトクン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
陽だまりのキミ

【Ｎコード】
Ｎ５２１６Ｗ

【作者名】
トマトクン

【あらすじ】
「私、邂逅っていう言葉、すごく素敵だと思います」。サファイアの瞳を持つ上沢すみれは、いきなり僕にそう言ってきた。そう、邂逅とは偶然の出会い。だけど僕たちは、けっして言葉通りの偶然ではなかったのだ。——じれじれな二人が徐々に近づく素朴なラブコメディー。（１１／４　タイトルを変更しました）

01（前書き）

ミゼラブル――哀れな様子。悲惨なさま。

01

六月。
初夏だというのに、ずっと雨が降らない。
ここは雨よりも雪。重苦しい心情よりも美しい幻想の場所。

雲間にたなびく稜線を眺め、白樺と壮大なビート畑を背景にして、私は大地に腰を下ろした。

ラップトップを開き、音声のプレイヤーを再生。
小人達のラジオの便りが風に乗って聴こえてくる。
いずれは記憶の果てに追いやられる青春という名のミゼラブルだ。

「……」

やがて、遠くから陽炎のように人影が見えてきた。
その人影は、ゆっくりと近づいてくる。
私は、かの人に挨拶をするのだろう。
音声のプレイヤーを停止し、ラップトップを閉じて立ちあがる。
さて、常々疑問に思っていることが一つ。
今、私はどこに立っているのか。
そして、私はどう行動するべきなのか――。

０１（後書き）

ご感想、ご指摘、評価、レビュー、お気に入り登録など、随時受け付けております。

作者の大きな励みになりますので、ぜひ気軽にお願いします。

01 （前書き）

ドラマツルギー――演劇・戯曲に関する理論。演劇論。作劇法。

01

「私、邂逅っていう言葉、すごく素敵だと思っています」

僕が気になっていた女の子は、開口一番にこう言った。

邂逅――めぐりあい。偶然の出会い。思いがけない顔合わせ。邂逅とは、そんな意味を内包している言葉。

だから彼女がこのような発言をしたとき、いささかピントのずれた表現を使っているものだと一瞬だけいぶかしんだ。しかし彼女の表情を窺ってみると、その感情はいとも簡単に氷解していった。

この出会い。

偶然か、必然か。

因果関係はいずこか。

まるで彼女は、ドラマツルギーにおける明確な役割を求めているようだった。

それは定型的な演技。

さらには現状の変化。

そして、瞬時にこの言葉を思い出す。

『全世界は劇場。すべての男女は演技者。人々は出番と退場のときをもっている。一人の人間は一生のうちに多くの役割を演じるのだ』

とにかく、今必要なのは起こっている事象に変化をつけることだった。

今、僕たちは、一つ先のステージへと進むための内的なエネルギーを求めていた。それをお互いに知っていて、理解していた。だからこのやり取りは、お約束で儀式だった。

「あのさ」

そして僕は、その先の言葉を飲み込んだ。

「なんですか？」

女の子は首をかしげてきた。

「もしかして僕達はさ、偶然ここで出会ったことになる？」

「はい」

「そうすると、以前にも出会っていたことにもなるんだ」

「はい」

もう一度、その言葉を繰り返した。

「だから、邂逅なんです」

「つまり、僕と君はここではないどこかで出会っていた、と」
もちろんこの言葉は、一義的な解釈ではなかった。とはいっても、デジャヴに似た不確定性極まる無意識領域での漠然とした問いでもなく、不特定多数の女の子を不純な動機で貶める誘い文句でもなかった。
理由は、その女の子と暗黙裡の了解があったからだった。これまでに、彼女とはいくども視線のやり取りをしてきた。しかし彼女は、あのブロックサインみたいなやり取りをフラットに清算したがっていた。
そしてこの瞬間こそが、偶然の出会いだと称したかった。
でも、僕はこのやり取りに白々しさを感じていた。
――なぜなら僕達は、このよく晴れた昼下がりの日曜日に、広大な敷地面積を誇る都立公園の一角の穴場スポットに現れることをお互いに知っていた。
そう、すでに知っていた。知らないふりをしていたし、知らないふりにしていた。
そのせいもあってか、罪の意識を共有するような、なんともいい難いものを感じてしまった。それはフォークダンスで異性と手をつなぐ前のかしこまった演出にも似ていたし、あるいはクジャクが交尾をする前に行う直截的な求愛ダンスとも比喩できた。
やはり、違和感がほんの少しだけ残っていたのだ。
そして、その感情が伝わったらしい。
女の子が眉根をよせていた。

「やっぱり、おかしいですか？」

彼女はいささか悲しそうに言った。
でも、彼女の表情は明るかった。

きれいな栗色の髪がゆれて、瞳は輝いていた。そう、彼女の瞳。
それは不思議な彩色で、サファイアとかそんなかんじの色だった。

「私、あなたとどこかで出会ったことがあるような気がします」

「うん」

「そんなふうにいったらどう思いますか？」

「だから邂逅なんだ」

「はい、だから邂逅なんです」

「でも」

「でも？」

「僕はそう思わないって言ったらどうするの？」

女の子は少し黙りこんでから、

「いじわるしないでください」

と、小声でつぶやいた。
頬が少しだけ膨らんだ。

「いじわるはしていないよ」

「いじわるしました」

年相応の表情だ。

「そっか」

「だったら、思わなくてもいいですけど」

女の子は、拗ねたように言った。
だけど、本心ではこうだった。

――これは邂逅なんです。

瞳は言葉よりも雄弁に語ってくれた。

「やっぱり、君とはどこかで出会っていて、今の邂逅はほんの偶然だったんだね」

結局、僕は顔をすくめながらそうつぶやいていた。
すると女の子は、いたずらが見つかった子供のように笑ってごまかした。

「なんか諭されているみたいですね」

「うん、そうしているから」

だってそうだ。

今から綺麗なスタート。
なんてわけにはいかない。
僕はこの二ヶ月間、自分自身の変化を深く自覚してきたのだから。

◇◇◇

僕が、件の女の子を意識した瞬間は、二か月くらい前だった。
それは彼女が、ほんの背景だった一部分から急にフォーカスされ、極めて重要な視点として認識されたからだといえた。ただ、なんとなく、ほんの一瞬だけどこかで交差した光景——繰り返し見続けていただけに過ぎなかったその視点が、いつのまにか彼女を明確にとらえていた。
ときには、ある絶対的な瞬間を切り取ってしまいたかった。それは、ヴァインダーに納めてしまいたいぐらいに思えるほどだった。
しかし、厳密にはひとめぼれといった甘美な現象ではなかった。一拍も二泊もおいた距離で気になっていったかんじなのが不思議だった。

◇◇◇

ともあれ、女の子は邂逅を主張した。

僕とは、意味合いが異なっていた。

最初こそは起こっていたはずの偶然が、積み重なった上での必然へと変貌したと思っていた。

彼女と出会うことが、偶然から必然へ。

僕は、そうだと思っていた。

そして彼女にどう声をかけようかと悩みながらも、僕自身が圧倒的にこういうことへの向いてなさから投げっぱなしにしたままだった。だけど、物事というのには適宜なタイミングが存在していた。自然と、声をかけるタイミングがあった。すべてはそういうふうに出来上がっていて、あとはなぞるだけに過ぎなかった。

もう少し深く考えてみれば、お互いが知人との関係性を構築するために定めた数値基準を満たしたともいえた。関係性の変化を求める、ある一定の閾値を突破したとも表現できた。

これらの現象は、とらえようのない不思議な感覚として僕の胸中をえぐってきた。だから、なんでも好意的に受け止められる高揚感があった。

ただ、俯瞰的に見れば、よくある事柄に違いなかった。なぜなら、現に世の中はそういう現象で満ち溢れている。街を歩けば、仲睦まじい男女のペアはそこかしこに見受けられるし、友人の朝日も女の子とステディな関係性を保つのに事欠かない。

そう、普遍的なこと。でないと、人は悠久の孤独にさらされてしまう。そういうふうにできている、と理解すべきなのだった。

◇◇◇

「あの」

と、女の子がつぶやき、僕は意識をそちらに戻した。

彼女は、僕が持っていたスケッチブックの端を見ていた。そこには、色彩の階調を比較するために遊びで書いた青葉が描いてあった。

「これは、病葉みたいな色ですね」

女の子は、くすんだ赤と黄色を混ぜたような葉を指さして言った。

「わくらば？」

「はい、病葉です」

「わくらばって？」

「あー」

どうやら僕の意図を理解したみたいで、女の子は説明をした。

「病葉っていうのは、夏の青葉にまじって、赤や黄色に色づいてしまった弱めの葉のことなんです」

「へぇ」

「その由来から、儚さという意味を感じさせる言葉なんですよ」

「儚いか」

「だから、私、この言葉も素敵……いえ、好きなんです」

「好き？」

「はい」

「さっき素敵って言ってたけど、素敵と好きに違いはあるの？」

「ありますよ」

「なんだろう？」

「それは教えません」

「どうして？」

「なんとなくです」

「いじわるだよね」

「私はいじわるでもいいんですよ」

女の子は、なぜか嬉しそうにつぶやいた。それから口をもごもごさせて、なにかを言いたそうにした。

「どうしたのさ？」

僕はおそらく望み通りの返答ができた。

「さっき、面白いことを思い出したんです」

「ん？」

「あのですね、邂逅と書いてわくらばとも読めるんですよ」

「そうなの？」

「そうです。不思議だと思いませんか？」

02

結局そういうふうにして、僕はその女の子と邂逅した。あの日から一か月が経過し、そのあいだ、三度都立公園の穴場スポットでたわいもない話をしてきた。

便宜的に二度目と位置づけて会ったときには、すべきことがたくさんあった。なにせ初めて言葉を交わしたときには、お互いの名前を名乗ることを忘れていたほどだった。まずは自分の名前を名乗り、女の子も自分の名前を名乗った。

それから僕たちは、少しずつパーソナル情報を教え合った。彼女、もとい上沢すみれは、ハンガリー人の祖母を持つクオーターだった。そのサファイアのように澄んだ瞳のルーツは、そこにあるといえた。

僕は、上沢が青い空やエンジのレンガでできた中欧、中東欧の美しい街並みにいるのをイメージしてみた。しかしふわふわとした柔らかさや透明感のある彼女の雰囲気は、どちらかといえば北欧のテイストにマッチしているようだった。

森に住んでいる女の子。
そんなイメージであった。

◇◇◇

他にも、僕は上沢についてたくさんのことを知った。

一つ年下。中三、十五歳。独特の世界感、感性がある。読書や手品（する方）が趣味。

好きな食べ物は、日替わり。そのうち週三日はお米で、二日は小さなお菓子、後は日々の生活でアトランダムに変化するらしい。

好きな色は、緑全般。正確には、モス、エメラルドなどといった形容詞がつくグリーンである。緑の思い入れについては、上沢とこんな話をした。

「あの、先輩」

「ん？」

「一つ聞いてもいいですか？」

話をしてきてわかったことだが、上沢はこういう前置きを頻繁にしてきた。

「いいよ」

僕がそう言うと、上沢は堰を切ったように話しはじめた。

「私、思うんです。どうして緑には形容詞がないんだろうって」

「緑に形容詞？」

「はい。たとえば、他の色は白い、黒い、青い、赤い、黄色い、そんな感じで言葉の表現ができますよね」

「うん。たしかに」

「主要のカラーは、どれもそういうふうな使い方ができるんです。でも、私の好きな緑色には、そういう表現ができないんですよ」

「いや、にぎりこぶしまでしていうところじゃない気がするけど？」

「そんなことありません」

「えっ？」

「先輩は緑の重要さをわかっていないんです」

上沢は、やけに強く力説した。

「どういうところが重要なの」

「それは、ですね。緑色の半分は優しさでできているところです」

「えっと、製薬会社の文句じゃないんだから」

上沢は、うっ、と唸った。そして小動物じみた動作をとりながらも、さらに話を続けてきた。

「せ、製薬会社の文句もなにも、先輩、見てくださいよ。ここの都立公園の周りは緑でいっぱいじゃないですか。憩いの場であるのは

緑のおかげなんです。緑は癒されますよね」
「でも、それは緑というより自然ともいえるけど」
「あっ、そうともいえますよね」
「だよね」
「だけど、緑色なのは間違いないんです」
上沢は、胸をはって主張した。
「だからわたしは、主要カラーである緑が除籍されているかのごとく形容詞扱いされないのが不満なんです」
「でも、みどりい、とか、みどりいろい、っていうのは締まらないな」
「み、みどりい。みどりいろい」
なぜか上沢は、感銘を受けていた。
「強引に使うという手がありましたか」
「強引に使うって」
「やりますね、先輩」
上沢は聞く耳を持たなかった。

「私、決めましたよ」

「ん？」

「私はその名称を勝手に使います。みどりい、みどりいろい」

「え？」

「ぜったいに、はやらせます」

「はやるといいよね」

僕は、おざなりにいうにとどまった。

◇◇◇

それから、あるときにはこんな話もした。

「私、表層にとらわれない自由を標榜したいんです」

「表層？」

「はい。かたどられた自由というか、そうであるべき自由の束縛さえも解き放つ自由といった感じなんです」

「かたどられた自由？　そうであるべき自由？」

「本当の自由とはなにか、ということです」

その後も上沢は、この説明にしにくい表現を、めいっぱいの言葉を使って語ってくれた。

しかし、僕にはなんだかわからない。いや、わからなかったというのは正しい表現でない。おぼろげで、薄いもやがかかったようにぼんやりとした理解までは到達している。でも、それは曖昧で不確かなものに違いない。

言葉にしにくいし、言葉にできない。

そんなもやもやが残っていた。

僕は上沢のことをわかりたいとは思っている。けど、わからなくてもよいとも思っている。つまり、完璧に理解する必要などどこにもないということ。ただ、上沢の突飛な発想や独特な言語センスを触れているだけでよかったともいえる。

抽象的。哲学的。概念的。形而上的。

そんななにかで、良かった。

心地よい波長を感じられれば。

そして僕は、上沢と言葉を交わす前からその雰囲気をなんとなく感じとっていた。それはシックスセンスに近い感覚だった。

彼女と会話をしたら、きっとこんなふうになる。

心の奥底ではそう思っていた。

それはフィーリングとか空気感とかかみたいのでわかったことであって、そのような曖昧な揺らぎで確立されたなにかがいかに正しい

かを実感してしまうほどだった。
だから僕は、その上沢のフィーリングを好んでいた。

03

こうして僕たちは、逢瀬ともいえないささやかな出会いを楽しんだ。
時は二月から三月へと、緩やかに移行していった。
あの邂逅の日、ちょうど上沢は高校受験を終えたころだった。そして、それから三週間が経過し、都立、私立の合否判定が出ていた。
上沢は両方とも受かり、都立を選んだ。そこは僕が通っている高校だった。

◇◇◇

その日は三月中旬の日曜日で、よく晴れた朝だった。
際立った予定もとくになく、いつもどおり公園にいくつもりであった。
出かける直前に、部屋の窓を開けてみて、体感温度を確かめた。温かな春らしさを予想していたが、びゅう、と突発的に吹いてきた風で身が縮こまるほどだった。
僕は着ていく服装についてあれこれ考えをめぐらせた。
しかし結局、いつものラフなオーバーコートをひっかけていた。

半円状の糸くずがついているシックなブラウン系のマフラーを巻くことも忘れない。行く前に糸くずを裁断しようとしてはさみを持ち出したのは良かったが、さあ切るぞという段階でにわかにダメージ加工であるのを思い出した。慌てて取りやめ、糸くずは事なきを得た。しかし、相変わらずこういうことへの物覚えの悪さには辟易してしまう。

気を取り直し、マフラーの後はニットをかぶった。それから、オレンジのヘッドフォンを装着した。スイッチを入れると、心地よい音楽が流れてきた。

曲はボブ・ディランの『風に吹かれて』で、全世界への影響力を自負する椎名さんからの強引な推薦曲だった。

椎名さんとは、秀才の浪人生で二つ上の先輩だ。謎の正義感と、不思議な女の子思想を持っている人物である。

しかしそんな彼は、周囲を自分のペースに巻き込む人でありながら、どこか憎めない人でもあった。それは彼がいると、場の空気をプラスに変換させてしまうからだった。なんらかの不思議な力を持っているのだろうか、と僕はよく思った。

「――」

やがて、曲はサビの部分に入り、その歌声に耳をすませた。

僕はこの音源を渡されてから初めてボブ・ディランの存在を知ったほどの洋楽音痴で、『時代は変わる』も『ライク・ア・ローリング・ストーン』も知らなかった。もちろん『風に吹かれて』だって知らないでいた。さらには、ヒッピーの文化でさえ知らなかった。

要するに、音楽については曖昧な知識しか持ち合わせていなかっ

た。

　ある日、椎名さんがボブ・ディランの印象を躍起になって求めてきたので、ぼくはうちひしがれた子犬が思い浮かびました、と素直に答えた。

「三木。おまえはなにも分かっていねえ」

「そうですよね」

「そうだ。三木は、なにも、分かって、いねぇ」

　椎名さんは、わざわざ言葉を区切りながら言った。

「でも、椎名さん」

「なんだ？」

「椎名さんも、この曲聴くの二度目ですよね」

「そうだ。文句あるか」

「いえ」

「ならいい」

　椎名さんは、自信に満ちあふれた調子でうなずいた。

「とにかくだな、三木。俺がボブ・ディランの曲をもっと聞けば、世界はより良い方向に変わっていく気がするんだ」

やはり、彼はマイペースだった。
そして時に傲慢で、傍若無尽でもあった。
けど、憎めない。
それが彼の本質だった。

僕と朝日は、いつも彼に苦労していた。けどなんとなく、人生において大切なのは過度の自信ではないかと、微妙な猜疑心にかられてしまうのだった。

◇◇◇

身支度を終えた僕は、テーブルの上に置いてあった本を手に取り、外へ出た。本は由佳先輩が勧めてくれたものだった。デッサンに飽きたら読もうとハナから決めていた。

都立公園までの道程は十分ほどで、僕は上沢のことを考えていた。上沢は、かわいさや美しさなどといったストレートな言葉ではくくることのできない不思議な魅力を持っていた。むしろそういった表現を瑣末なものとして対岸に追いやり、どこか奇妙でずれている素敵さの方に目がいった。

さらに上沢のことを好ましく思えるのは、その服装のコーディネートだった。他の女の子とは違う、一風変わった見せ方を知っていた。

上沢は、緑を基調としながらも、人がどうしても興味を引いてしまうような変わった色合いをチョイスしてきた。おかげで上沢と会った日は、色彩図鑑を見る時間が多くなってしまうほどだった。
やはり、僕にとって上沢は、特別な存在として映りつづけていた。ややもすれば、日常から乖離してしまいそうな雰囲気を醸し出している上沢ではあった。だが、核となる信念を持ち合わせてるみたいで、僕が心配することはなにもなかった。

◇◇◇

やがて、僕は目的地の都立公園にたどり着いた。
いつもの切り株ベンチを見つけ、そこに座り込んだ。この切り株には今月に入ったあたりからひこばえが伸びていた。たった一週間足らずでかなり成長した。
とりあえず、スケッチブックを取り出した。
後、二時間くらいしたら上沢がやってくる。
そんなことを考えながら筆を進めていたが、三十分ぐらいが経過したところで上沢らしき人物を見つけた。
上沢らしき人物ではなく、確実に本人だった。
しかも、なぜか踊っていた。それもわりと近い距離で。
なのに、上沢はこちらに気付いていていなかった。

木々が上沢の存在を上手いぐあいに覆い隠していて、僕が彼女を見つけたのは一種のセンサーが過敏に働いてしまったからかもしれない。

踊る上沢。梢、斜光。木々の隙間。そのおかげか、上沢自身が光に祝福されているみたいで神秘的に見えた。

しかし、やはり上沢はどこかおかしかった。

なんていうか上沢は、フィボナッチ数列を想起させる規則的な動きをしていた。

たとえて言うならば、ひまわりや松ぼっくりの造形比率にみられるうずまきのような感じで、どうしても視線を向けずにはいられない螺旋の円舞だった。

◇◇◇

数分後、上沢のところまで行って、声をかけた。

「紅茶飲む?」

僕は、ペットボトルを差し出しながら言った。

上沢は、

「あ」

とつぶやき、サファイアの瞳をこっちに向けた。

頬も膨らませている。
が、これは上沢の癖だった。その癖は、際立った感情の発露を見せるときに必ずするしぐさなのだ。

「びっくりした？」

「お、おどろかせないください」

上沢は、眉根をよせて言った。
眉根はよせているけど、なぜか微笑ましい。

要するに、その緩くふんわりとした格好のせいだ。
今日の上沢の服装も、グリーンを基調とした東欧あたりのテイストのものをチョイスしていた。種類的にはAラインというらしい。

それと肩からは、少し凝ったタスキがけのようなかんじでポシェットとバックの二つを下げていた。中には、万年筆、フェルトペン、レターセット、ペーパーナイフ、メモ帳、懐中時計、伊達眼鏡、手品道具、ドロップ缶などといった雑貨系の小物、いろんなところに栞を挟んだ数冊の本、それと簡易カメラなんかが入っているのを、僕は知っていた。

そして、なんとなくだけど。
最近、僕は、上沢から醸成されたレトロな雰囲気を感じていた。

「こ、こんなに早く先輩がくるなんて」

「うん？」

「なしです。今のなしですからね」

と言い、上沢の頬がだんだんと赤くなっていった。

こうなると上沢は、口からトランプを出すような手品をしてその場を取り繕うという理解不能の行動をしてきた。

僕が一番和んでしまう瞬間だった。

そして上沢は予想に違わず、素早くトランプを取り出した。

さあくるぞ、と思った瞬間に、上沢はいち早くやっていた。

04

「さっきのワルツ？」

「……フーガです」

上沢はすねた調子で言いだした。

「あいにく、僕はワルツもフーガも違いがわからないんだ」

「私も音楽はからっきしです」

それっきり上沢がこの話題を収束させようとしていたので、僕はもう一度ぶりかえした。

「じゃあ、ベートーベンをイメージして踊っていたとか？」

「ち、違いますって。どうしてベートーベンが出てくるんですかぁ」

「そうだね」

「でも、ほんとはバッハをイメージしていたんですけどね」

今度は、投げやりな調子だった。

「しかし、僕にはベートベンとバッハの違いがわからないんだ」

「私にもわかりませんよ」

「だったら、ほんとはボブ・ディランをイメージしていたとか」

「いえ、ビリー・ジョエルです」

「そして、その二人の違いもよくわからない」

「私もです」

なんていうか、変な意地の張り合いだった。

もはやこのやり取りは、著名な音楽家をやみくもに挙げるだけになっていた。なので、いくつか挙げていくうちにストックが切れてしまう。

もともと音楽には素養がない。

仕方のないことだ。

「もう、先輩の負けですからね。人の名前の最後に『ん』を多くつけた先輩の負けです」

「え、どうしてさ」

「どうしてもです」

「勝負じゃないんだけどなぁ」

僕がそう言うと、上沢は少し考え込んでからこう断言した。

「いいえ、勝負なんですっ」

「ん？」

「なんていいますか、ここは勝負なんです。どうでもいいかも、って思うべきところで無性に張り合いたくなっちゃうときってありませんか？」

「ああ、そっか」

「よって、人の名前の最後に『ん』を多くつけた先輩の負けです」

「でも、しりとりじゃないんだ」

「でもですね、先輩。最後に『ん』をつけるのは、唇を閉じている回数が多いから、なんとなく負けなんです。しかも、最後に『ん』がつく言葉を発するだけで、なんか完結してしまうような悲しいイメージが与えてしまうじゃないですか」

こう言われても、なんて言えばいいかわからなかった。
だけど僕は、こういうなんともいえない論理の飛躍を語る上沢が好きだった。安易に過程を説明できない話の転がり方は、僕を不思議な気分にさせてくれた。

肺腑をなぞるような感覚。
わずかな感情の共振。

「で、結局なにをしていたの」

「あー」

上沢が頭をかかえた。それに合わせて、きれいな髪がくしゃとなった。

「やっぱりそうですよね」

「そりゃそうだよ」

そう告げると上沢は、少しはにかむような笑いを見せたあとで、

「笑わないくださいね」

とつぶやいた。

「うん。笑わない」

「ほんとですか」

上沢がジト目で確認した。

「という保証はないかも」

「と見せかけて、ぜったいに笑わないと誓う優しい先輩ですよね」

「というのはフェイントで、心の底から大笑いするつもり」

「というのがフェイントのフェイントで、笑ったら謝ります。土下座しますすくらいの心持ちですよね」

「――」

変な会話で文章が繋がっていた。しかし僕が沈黙したことで、上沢は踊っていた理由について話しはじめてくれた。

「そ、そのですね」

「うん」

「なんとなくですよ」

「なんとなく？」

「わたし、遠心力の気持ちをできるだけ理解しようと思ったんです」

「えっ？　遠心力の気持ち？」

「先輩。今、笑いましたぁ」

上沢はふくれていた。

「少しだけだって」

「もうっ、笑わないっていったじゃないですか。先輩でも教えませんよ」

「うん、ごめん」

「まだ、笑っています」

「もう笑ってないって、でも、どうしてそんなことをするの？」
僕がそう聞いてみると、上沢は渋々といった様子で言葉を続けてくれた。
「それはですね。時々、無性に変なことを体感したくなるといえばいいのか……なんていえばいいのかなぁ。変な疼きみたいなのを止められなくなってしまったような。なんか衝動みたいな感覚で、胸中がいっぱいになってしまって」
上沢の語尾は段々と弱くなっていく。上目づかいで、様子をうかがってもいる。
そして、上沢の顔が赤くなっていく。
彼女は、またトランプの手品でごまかそうとしていた。だが、かろうじて思いとどまったらしい。その手品道具をふところにしまった。しかし、両手が手持ちぶさたになっていて、その赤くなった顔をせわしなく扇いでいる。
「あ、あー、先輩？」
はにかむようなしぐさだった。
「あの、私変ですよね」
とは言いつつも、やけに晴れやかな笑顔でいた。
「先輩。でも、私は変でもいいと思っているんですよ。それと、なぜかはわからないんですけど、先輩ならわかってくれそうな。……なんだか、なんですかね。上手くいえないみたい。先輩は、空の彼

方に去っていく飛行船を眺めているときの心境に似ています。要するに、私が抱いた遠心力の気持ちは、先輩と話をしているときの気分にそっくりみたいなんです」

「えっと」

「だから、今、先輩とこんなことしてみたくなってしまいました」

すると、僕の手をとって回りはじめた。

「もうっ、やぶれかぶれですよね、私」

上沢はてれくさそうに笑った。

僕は「ジャイアントスイング？」なんて言って、はずかしさをごまかした。

すでに上沢は開き直ったのか、なんだか二、三週目から楽しそうだった。

めいっぱい離れようとしている。なのに、距離は保ち続けている。もちろん、遠心力の気持ちなどわからない。

だが、その時だった。

ふいになにかを感じた。曖昧模糊で不透明で、パステル調の拡散的ななにかだった。

おそらく、十五歳とか十六歳の――これぐらいの年頃から本格的にはじまるアレに違いなかった。僕は、無意識化で放出されているあの化学物質の存在をひそかに感じていた。

そしてそれは、魔法となんら変わりはなかった。

気がつけば、さらに好きという感情が生まれていた。

◇◇◇

回り終わった後は、なんだかお互いに変な気はずかしさが芽生えていた。けれど、それすら許容範囲だった。
しばらくして、上沢がぽつりとつぶやいた。

「せ、先輩」

「ん？」

「わ、私、なぜかさっきよりもはずかしいことしていましたよね」

「うん」

「な、なんででしょうか？」

「僕に聞くの？」

「……そうですよね」

上沢は、へこんだかのような微妙な表情をしていた。

「じゃあ、気分転換に絵をかいてあげるから。そこにすわって」

僕は、ひこばえの生えたきりかぶを指差した。
しかし、自分でもこの言葉には驚いていた。今まで、まるで念頭になかったからだ。
そして、そこで気がついた。
――どうしてだろうか。
僕は、少しだけ困惑した。二重の意味で困惑していた。
どうしてこれまで、上沢の絵を描くことを思いつかなかったのだろう。どうしてこの瞬間に、上沢の絵を描くことを思い立ったのだろう。
それが、少しだけ不思議でならなかった。

◇◇◇

「先輩」
「なに？」
「昨日ですね、私、先輩と同じ学校の合格通知書をもらいました。そして、今年の四月からそこに入学するつもりなんです」
「え、同じ学校？」
「はい。同じ学校、そして後輩です」

僕は驚いた。驚き半分、嬉しさ半分といったかんじだ。

「それはおめでとう」

「ありがとうございます。これで私、ようやくホッとできます。でも、ほんとは試験終えたときから受かる自信はあったんですよ」

「そっか」

「えっ、どうしたんですか？」

「だから、僕が最初に声をかけた日、そういう雰囲気ができあがっていたんだ」

「あー」

上沢がわずかに顔を赤らめた。

「でも、どうして僕の通っている学校がわかったの？」

「あ、あの、ごめんなさい。前に先輩が、あの特徴的な制服を着て歩いているのをみかけたんです。だから私、あのとき先輩に声をかけられるのを待っていたのかもしれません」

「そうなんだ」

「その日は、てんぱって変なことも言ってましたし」

「邂逅とか？」

「はい」

「それにしても、結局ばれてしまいましたね」

「うん、ばれてた。だから話しかけられた」

「じゃあ、なんだかそういうのって素敵だと思うことにします」

別れ際、上沢は照れくさそうに笑いながらそう言った。

05

あの日、僕は上沢の絵を描きながらあることを思った。

——思った？　なにを？

いや、最初に言葉を交わしたときからか。あるいは、ほんの背景にすぎなかった彼女が重要な視点として認識されてからか。

もしかしたら、前から思っていたのかもしれない。

彼女とは、この都立公園以外でも会いたかったと。

◇◇◇

そして、上沢は言った。

「同じ学校、そして後輩です」

僕は、上沢と学校で会う場面をイメージしてみた。イメージの中での上沢は、背中の割れた特徴ある制服をいたく気に入っていた。

それから、水色を基調とした色合いと、妙にガラス張り多い校舎

に目を輝かせている。絨毯が敷いてあるラウンジに目を凝らしている。うわばきではなくスリッパであることに、琴線を揺り動かされている。中央にプールが配置されている不思議な設計に驚いている。
そんな姿が、容易に想像できた。

◇◇◇

さらに上沢は、読書が趣味だった。
そして僕は、『文芸部』の傍系である『読書同好会』に籍をおいていた。
『読書同好会』とは、去年の七月、由佳先輩の誘いを受け、友人の朝日、彼の幼馴染の日坂とともに入部していたクラブだった。

部長　小手川　由佳（二年）
　　　三木　和人（一年）
　　　朝日　優介（一年）
　　　日坂　綾（一年）

現在はこの四人。
少数精鋭ではなく少人数である。
同好会なのは、三つ年上の清水女史がケンカ別れしてできた新興勢力だからだ。事実、場所も文化棟の中でもはじっこで隅の方に位置していた。

俗にいうマイナークラブ。
そんなふうに言っても、過言じゃなかった。
しかし、『読書同好会』のことは広く生徒に膾炙していた。
理由は、『読書同好会』の祖でもある清水女史が、椎名さんに匹敵するぐらいの変人であったからだ。誰もがその存在を意識せざるをえなかった。
実際に彼女と面識があるのは、由佳先輩しかいない。もちろん、僕、朝日、日坂なんかは面識すらない。
なのに、彼女の人となりが窺えるエピソードを、僕たちは知っていた。
彼女は、とにかく、北海道を題材にした作品に傾倒していた。
特に、コロポックル、マリモ、ラベンダー、五稜郭、音響道路なんかがお気に入りで、それに関連するグッズが部室にあふれていた。
また、ジャンルを問わず、その地域の作品には終末的でせつない展開が多いのをいたく気に入っていた。
当時は、彼女の影響で部員の数も多かった。
しかし彼女が夏に引退してからは、残された部員達が辞めたり、元の『文芸部』へ戻ろうとしたりしていった。そうして、『読書同好会』は小さな集合離散をくりかえし、短期間でいろんな変遷をしながらも、消滅寸前にまで追い込まれてしまった。

◇◇◇

いつもお気楽な由佳先輩が、この話をしたときだけは真面目に懐古してくれた。
僕はその信じられないほどのギャップに、目をしばたたかせて驚いてしまった。

「和人くん。あのときは、先輩を中心としてものすごくまとまっていたの。信じられないぐらいのまとまりだった。ほら、合唱祭や桜樹祭なんかのアレ、異様な団結力を発揮するときってあるじゃない。それすらも凌駕するかんじだった」

「結局、『文芸部』の半数近くが離反して、先輩を中心とした新しい同好会は発足したの。『読書同好会』は、まるでエネルギーとかバイタリティーのかたまりみたいだった。きっと私たちは、先輩を擁立して、革命をおこしたような気分にひたっていたんだと思う」

「もちろん、私たちにはそんな自覚はなかったけど。でも、少なくとも、先輩のエキセントリックだけどなにかを面白いことをしてくれそうな、とんでもない雰囲気にすごく期待していたんだ。だから、そんな楽しげな気配にひかれてついていった。そしてそれは期待通り――いいえ、期待以上だったの」

「先輩は、ほんとに唯我独尊の人だった。でも、周囲の人たちを楽しませることにかんしては一日の長があった。彼女は、普段の活動だけじゃなく、いろんなことを企画して私たちを楽しませてくれた。そう、たとえば、少し変わった啓蒙活動なんかをしたりとか……。短期合宿なんかもよくやった。ほかにも出来の悪い映画を撮ったり、公園で遊んだり、グッズ集めたり、全然関係のないことばかりだった。まるで出来の良いフリーサークルみたいだった」

「しかし、夏に先輩が引退してから、状況は一変した。つまるところ、残された私たちはなにをしていいかわからなくなっていた。先輩のように、北海道を題材にした文学に興味があるってわけでもない。だから、『さて、どうしようか』ってなった。誰もが唖然としていた。私たちはセミのぬけがらのようだった。祭りの後のなんちゃら、みたいな雰囲気になってしまった」

「そうなったら、みんな、元の居場所や前の『文芸部』が恋しくなっていた。居場所があるのに居場所はなくなった。ニュアンスとしてはそんなかんじだった」

「たしかに、あのころは間違いなく楽しかったんだ。だからこそ余計に、楽しさで漠然と繋がっているだけの無意味な連帯感は、本来のコミュニケーションではなかったのかな、とつよく感じてしまうほどだったの」

「そしてその瞬間、私はあることに気がついた」

「気がついちゃったし、気づかざるをえなかった」

「これは、とても悲しいひらめきだった」

「結局、『私』の価値観や哲学をいだいていなければ、そのときの喪失感や孤独感はどこまでもつきまとうものなんだと――とりとめなくそう思ってしまったの。この問いかけはまるでメビウスの輪のように、無限の繰り返しとなって再生されつづけた。少しずつ、奇妙、希薄、諦観、無力、虚無といった感情にバージョンアップして浸食され、私は大いに困惑した」

――私はなにか大切なものを失くしている。いいや、それは違う。僕もなにか大切なものを失くしている。これだって違う。誰もが、なにか大切なものを失くしているのだ。

「困惑……。そう、困惑はした。でも、私はすぐに決断したの。自分に自発的な前進をうながした。私は、私自身が知っているのを知らなくてはならない。そして、あの頃はとても楽しかったんだ。だから、その場所にいたいとつよく思った。同好会を存続しようと考えた。賛同者を得ようとした。大切ななにかを、ぜったいに見つけだそうと思った。……やがて、私は一人のパートナーと出会った。その人は、一つ上の先輩だった。さらに、もう一人とも出会った。その人は、先輩と同じ学年の知り合いで、あの有名な工藤アキだった」

「で、そうやって小さな決意をしてから、秋、冬、春、夏と季節がめぐった。あのときから一年が経過していた。夏で、一つ上の先輩たちが引退していった。そして私は一人になった。でもそのとき、私の脳裏に六月の光景がよぎった。キミとキミの仲間たちが浮かんだ」

「ここから先の物語は、和人くんも知っての通りだから」

最後に由佳先輩は、照れ笑いをしながら話を締めくくってくれた。

「はい、これでめんどくさい話はおしまいっ。劇画調ではなんの効力ももたないけど、文字記号の世界では鑑賞に耐えうる話ができたでしょ」

「由佳先輩」

「ん？」

「素敵なクロニクルですよ」

◇◇◇

結局、こういう紆余曲折を経て、『読書同好会』は今に至る。
そう、今。今は『文芸部』でさえ部員が少ない。
要するに、当時の清水女史の影響力が絶大すぎた。

その残滓は、『読書同好会』に籍をおいている僕たちが、ある通り名でくくられていることからも散見される。それと、清水女史がコロポックルをことあるごとに喧伝していた効果もある。また、『読書同好会』の部室が文化棟の端にでっぱりに位置していて、ちょうど木々の葉が建物を覆いかぶさるように見えるのも影響している。

そのせいか僕たちは、こう呼ばれていたりする。

『蕗葉の下の小人達』。
通称、『小人達』と。

◇◇◇

そして、ようやく最初に舞い戻る。

——僕が思い立ったあることとは。

それは、『読書同好会』の一員として、上沢に入部してもらいたいとのことだった。

06

春休み直前。
放課後で、僕は文化棟に向かって歩いていた。
ここまでくると、隣の小さな教会の尖塔もかろうじて目に入った。
文化棟は本校舎から少し離れた場所に位置していて、構造的には母屋と離れの関係に似ている造りだ。
この文化棟へと続いている唯一通路を歩く途中で、意外にも朝日と会った。

「お、三木じゃん」

「あ、久しぶり」

「ああ、一週間ぶりぐらいだな」

彼とはクラスが違った。部室で会わないから、一週間ぶりだった。

「朝日、顔ださないのか？」

僕が聞くと、朝日は困ったように笑った。

「顔はだしてきたぜ」

「ああ、そっか」

彼は逆方向から歩いてきた。つまりは、帰りなのだろう。

「でも、それだけさ。ちとやっかいごとに巻き込まれてしまってな。今は、アレなんだ」

朝日は、端正な顔を皮肉げに歪めた。

どうやらいつもの二枚目半的な大らかさが消えている。ジョークを交えた、ひょうきんな言葉使いも影をひそめている。

「まあ、身から出たさびなんだけどさ」

「……女の子か」

僕がそう言うと、彼はにへらと笑って首肯した。

さて、どうするべきか。

僕は、すこしだけ考えてみる。

『読書同好会』は基本的に自由である。暇なときに顔をだすというスタンスをとっている。だから、明確な活動日などは決めていない。活動日を決めなくても、皆、ほとんどの日に集まっている。

そこで、最近の朝日。

彼は顔をだしていない。それも、一週間近くだ。

実を言うと、さきほどまではさして気にしてもいなかった。だが、状況があまりよくなさそうなので、気になってしまった。

だけど、それは彼自身の問題。もちろん、僕が迂闊に介入すること
とではない。
手助けを求められるまでは必要ないのだ。
ただ、僕が話そうと決めていたことについては、現状ためらった
方がいいと思った。
僕は、由佳先輩、朝日、日坂の全員が集まっているところで、上
沢のことを話してみようと考えていた。ひょんなことから知り合っ
た後輩の女の子に、『読書同好会』を紹介して入部させたいと告げ
たかった。

しかし、今の朝日の状態だと、この話をするのは野暮な気がした。

「言っとくけど、三木がどうこう考えることじゃないからな。ただ、
俺の問題なだけだぜ」

「うん、わかってるよ」

「まあな」

「ん？」

「まあ、いつもどおりだ」

「いつもどおりか」

「おい、三木。いつもどおりでの言葉だけで納得しすぎじゃね？
いや、ほんとはそんな、いつもどおりでもないけどな」

「どっちなんだよ」

「まあ、とにかく、終わらせるよ」

「じゃあ、がんばれ」

「それで、終わったら三木ん家で鍋だな。月一の恒例のやつ。椎名さんがまた、大量の食糧をひっさげてやってくるぜ。後、へんなアジアン雑貨持ってきて大暴れするだろうな。そして俺たちが頭をかかえて暴走をとめるんだ」

「そうだね」

いつものことで、よく浮かぶ光景であった。
月に一度の鍋は、限りなく日常に近い非日常だった。

それは、朝日と椎名さんが一昨年の夏に知り合って以来、ずっと恒例の行事になっていた。回数も、とうとう二十回に到達した。
もしかしたら、僕が一人きりで暮らさざるをえない家庭事情を慮っての行動なのかもしれない。

そんなことを考えていたら、朝日がこう言った。

「おい、またいつものセリフいうけどさ。べつに、オマエのためってわけじゃないんだぜ。ただ、オマエが一人暮らしでよろしくやっているからいけないんだ。つまり、俺たちはその場所にあやかろうとしているだけだ。俺は、俺だけが楽しくやれればそれでいいと思っている。だから、へんなこと考えてんじゃねぇぞ」

「わかった、わかったよ」

「三木。俺のいうこと信じてねぇだろ」

◇◇◇

朝日と別れて、唯一通路を抜けた。文化棟に入り、幾多の文化系クラブを通った。文化棟の端に位置する部室までの距離は、意外とある。

三分ほど歩いて、目的地にたどり着いた。
目の前のプレートを確認する。

『読書同好会』

部室である。
プレートに変わりはない。
そして、僕は扉をあける。

誰もいない。
しかし、テレビはついている。音量は高い。
僕は改めて部屋を見渡すことにする。
部屋の中は亜空間とまではいかないけれど、グラフィックアートを施された窓枠の壁がだいぶ大きな主張をしている。そこに飾って

あるスプリングラフィも妙にマッチしているのだから、なんとも不思議な気分にさせられてしまう。

で、さらに、清水女史を中心として隆盛を誇っていたときのなごりが、今でも数多く残っている。コロポックル、マリモ、ラベンダー、五稜郭、音響道路に関連する五大グッズはいわずもがなで、そのほかにも、奇々怪々なものがざっくばらんに置いてあったりする。

もちろん、本もたくさんある。
四角い机が中央にあって、すみの方にも机がある。
棚もある。腰かけもある。

そしてそのいたるところに、ジェンガーやりかけみたいな形の本たちが積み重ねられていて、凄いことになっている。
もしかしたら、ここにはピブリオマニアの妖精が住んでいる。そんなふうに思ってしまう人がいるのかもしれない。

それほど、である。
それほど、本がある。
数量にしたら、五の位ぐらいか。

ほかにも、コーヒーセットなどといった日用品も常備してある。
変なものでいえば、交通標識のミニチュア版、あかずの踏切模型、誰も着たためしのないシロクマのかぶりもの、誰かが着たためしのあるメイド服、大正時代風の古書店売り子服、かなり凝った図書委員の腕章、不思議な形をしたホワイトボード、剣に見立てた傘、ハンドアーキーなどがある。

今、目についたものでも、これだけだ。
これらのものたちは、ここから先どこへいくのだろう、なんて迂

遠なことを考えていたら、

「ふんふん、ふふふーん」

と、かなり機嫌のよいハミングが聞こえていた。まるで風の歌のようだ。

やはり、由佳先輩だった。

「うわわわわぁー」

そして由佳先輩は、こっちを見て驚く。

さらには、エクトプラズムまで出しかけていた。

「かかか和人くん、なんでこのタイミングでいるのっ」

「えっと、そんなこと言われても」

「なんで、なんでなんでよー。私のへたくそなアレ、聞いてたっていうの？」

「あ、はい。聞こえました」

「あうぅー」

僕の返事を聞いて、由佳先輩は涙目になった。

「私、全力で気を抜いていたのに」

「由佳先輩？」

「私、ものすごい全力で気を抜いていたのにっ」
「あー、でも、あのですね、由佳先輩。僕は和みましたから。その、さっきの調子っぱずれのハミングは、由佳先輩によくあることで聞き慣れていて」
「えぇぇぇえっ！」
「も、もしかして自覚なかったんですか？」
とりあえずフォローしたはずだった。
しかし、まずいことになってしまった。
「ね、うそ、うそ、うそだよね。ちょっと威厳のある先輩をからかってみよう、と思っただけだよねっ、和人くん」
「あ、はぁ」
威厳のある先輩、というセリフの反駁は心に留めておいた。
しかし、そんなことを思っていれば、
「和人くんっ！」
と、由佳先輩がかわいい顔して怒鳴ってきた。柳眉をひそめて、僕に迫ってくる。
僕は、おもわず身を引いた。さらに、視線もそらした。
だが、そのおかげで、積まれていた本のタイトルに一筋の光明を見出した。それは、まさしく僥倖だった。

「由佳先輩っ」

「なっ！　あによー」

「あ、兄？」

「ハセヨー！」

「？」

アニハセヨ？

「か、噛んだだけ、そしてすべっただけなのっ」

由佳先輩は、さらに涙目になってしまった。

「……」

なんだかなあ、と僕は思った。

今日は困ったことになっている。

僕も大概にしてそうだけど、じつは由佳先輩も相当なうっかりものである。しかし、僕と由佳先輩における二者の関係性では、相対的に先輩の方がしっかりものということになる。

それは、由佳先輩が年上というスタンスを所持しているからである。

きっと正確には、もちつもたれつに違いない。

表現的には、どっこいどっこいでもいい。

根拠は、このぼくが由佳先輩と話しているときに限り、確実につっこみ役として徹しなければままならない場面が数多く存在することだろう。これはものの見事に、先輩の方がしっかりものという矛盾を示唆している。

しかしこのように、比類なきうっかりもの同士による泥沼仕様のデコボコ状態になっても、立場を流動的に変化させればなんとか補完しあっていけたりする。

それを、僕は知っていた。

ただ、うまくはいかない。圧倒的に、向いていない。

だけど、嘆くことでもない。

「――」

これ以上黙っていても仕方がないので、僕はその本を由佳先輩の前に掲げて言った。

「あの、この本のタイトルを見てくれませんか？」

僕は、由佳先輩に本を渡した。

「『調子っぱずれのデュエット』」

由佳先輩は、幼い子供みたいに、抑揚のない調子でタイトルを読んだ。

「そうです。だから、今度、由佳先輩が知らないうちにハミングをしていたら、ぼくも一緒に歌いますよ。調子っぱずれのデュエットです。僕は音楽について素養がないばかりか、実技のほうもからっ

きしだめなので」

「そんなこと、なかったくせに」

「えっ？　あ、それとですね、えーっと、鼻歌っていうのは無意識のうちに出てくるもの……ほらっ、由佳先輩も全力で気を抜いていた、っていってましたよね。けっきょく、えっと、生理現象みたいなことなんで」

「和人くん、的外れだよ」

「えっ？」

「的外れ」

「的外れ、ですか？」

「けど、いい」

「？」

なぜか由佳先輩は、遠い昔に想いを馳せているような顔をしていた。

「でもっ、私はそんなおためごかしに騙されたわけじゃないんだからね」

そして眉根を寄せながら、こうつけ加えた。
しかし、一応は機嫌が直ってくれたみたいだった。

ただ、僕はそれを見て、肝心なことを忘れていたのに気がついた。
上沢のことはもちろん、その前の段階だった。

「あの、由佳先輩」

「ん？」

「聞きたいことがあるんですけど」

「えっ？」

と、由佳先輩はいちどかわいく首をかしげたのだが、

「じゃなくて、今日だけ挙手制」

などと、腕を組んで言いだした。
僕は注文通りに手を挙げてから、由佳先輩に告げた。

「ところで、なぜそんな格好しているんですか？」

「う、はいっ？」

僕がきくと、由佳先輩はすっとんきょうな声をあげて、自分の格好を見た。付いていたテレビにも目を向け、机の上に置いてあったメモ用紙を手に取った。
そして何秒かのあいだ、あわあわした後、

「わ、わわ、忘れてたぁ────っ！」

と、絶叫した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5216w/

陽だまりのキミ

2011年11月9日21時16分発行